

共通教育「学習支援実践Ⅲ（日本語）」の2年目  
－留学生との協働活動をふりかえって－

吉 田 悦 子  
後 藤 綾 文

三重大学共通教育センター  
大学教育研究－三重大学授業研究交流誌－  
第 22 号 別 冊  
2 0 1 4 年 発 行

## 共通教育「学習支援実践Ⅲ(日本語)」の 2 年目

— 留学生との協働活動をふりかえって —

吉田悦子 (三重大学人文学部) ・ 後藤綾文 (学生総合支援センター)

### 1. はじめに

本稿は、2013 年度に 2 年目を迎えた共通教育における統合教育科目「学習支援実践Ⅲ(日本語)」の授業の取り組みについて報告するものである。

留学生への学習支援の一環としてチューター制度があり、新たに渡日した留学生は日本人学生のチューターサービスを受けることができる。2012 年度は、チューター活動を支援する授業実践を目的として本授業を開講し、チューターに求められるニーズの多様化に 대응することを意識して取り組んだ。しかし、一方で、チューターへのサポートとなる日本語学習支援のためのスキル養成を授業活動の中心にすることができなかつた。そこで、2013 年度は、チューター学生に身につけてもらいたい「話す」「書く」という発信型のコミュニケーションスキルの向上に取り組むことを最も重視した。同時に、異なる文化的背景をもつ留学生とのコミュニケーションスキルも必要とされており、留学生のニーズに合わせて提供できる日本語学習支援とは何かをさらに模索した。

本稿の構成は、まず、2013 年度の授業シラバスを提示して、授業の目的と概要について述べる。次に、前期授業での取り組みを振り返りながら、その成果をまとめる。最後に問題点と反省点にふれると共に、次年度への課題を整理する。

### 2. シラバス

まず、初回授業のオリエンテーションにてシラバスを確認し、この授業の概要について、次のように 2 つの柱を建て、説明した：

「この授業は、日本人学生と留学生によるペア・グループワークとディスカッションで進めます。

留学生の留学目的や学習目標、学部や研究テーマによって、留学生が求めている学習支援のニーズは異なっており、日常生活や人的交流など、学習以外のサポートが必要な場合があります。

そこで、二つの支援の柱をたてます。一つは留学生の日本語学習支援、もう一つは日本語チューターへの支援です。

前半は、自己紹介、留学生へのインタビュー、話すトレーニングと書くトレーニングの課題による活動を通して、必要な日本語コミュニケーション力を身につけるチューター側のスキルや方法を探ります。

後半は、こうしたスキルをもった日本語チューターの役割、チューター同士の連携や情報共有の方法、留学生の多様な相談に応えられる場など、他大学での取り組みも参考にしながら、

私たちが提供できる学習支援をどう実現していけるかを考えます。そして、具体的な取り組みとしてグループ・プロジェクトを立ち上げ、協働作業と話し合いによって、成果を出していきたいと思います。」

この概要に沿っておこなった授業内容を次に報告する。

### 3. 授業運営

#### 3. 1 授業計画と活動の流れ

学習テーマに沿った学習スケジュールについて報告する。以下のような活動をおこなった。

1. 4月10日：オリエンテーション  
自己紹介(日本人学生)。シラバスの説明。Moodle 登録。  
日本語エクササイズと課題の提出。  
「伝わらなかった経験を分析しよう。」  
(話すトレーニング課題1)
2. 4月17日：「やさしい日本語で話す」  
(話すトレーニング課題2)
3. 4月24日：留学生カフェ：「あなたの日本語サポートします」：留学生へのインタビュー
4. 5月1日：カフェの感想、報告。  
「留学生の日本語コミュニケーション力の育成について：留学生の日本語が気になるとき」  
(話すトレーニング課題3)
5. 5月8日：「留学生の日本語コミュニケーション力の育成について：やさしい日本語で書く(A)」  
(書くトレーニング課題4)
6. 5月22日：「留学生の日本語コミュニケーション力の育成について：やさしい日本語で書く(B)」  
(書くトレーニング課題5)
7. 5月29日：留学生カフェ
8. 6月5日：チューターに求められる役割とスキル  
：他大学の取り組み (他大学のレポート)
9. 6月12日 グループ・プロジェクトの活動  
(他大学のレポート)
10. 6月19日 グループ・プロジェクトの活動
11. 6月26日 留学生カフェ
12. 7月3日 グループ・プロジェクトの活動
13. 7月10日 発表準備
14. 7月17日 ポスター発表の練習・リハーサル
15. 7月24日 留学生カフェ：成果発表
16. 7月31日 予備日

前年度同様、前期は4月、5月、6月、7月の第4週の授業日を留学生カフェと重ねて、受講生の参加を義務づけると共に、この運営についても一部担当させた。また、留学生カフェは、授業の進行に応じて貴重な発表の場としても活用された。

本年度は、受講生15名でスタートし、このうち3名の留学生が受講生として登録されていた。留学生にグループ活動に参加してもらうことで、「留学生が求めている支援とは何か」を、日本語学習とそれ以外の支援とに分けて、具体的なニーズを探っていくという目的は自然と達成されることになった。2012年度同様、授業活動には2名のSAを採用し、授業でのサポートを役割分担した。

### 3. 2 授業活動内容

3. 1で示した話すトレーニングの課題(3回分)(野田・森口2004)と書くトレーニングの課題(2回分)(野田・森口2003)について報告する。

#### 3. 2. 1 「話すトレーニング課題1」

課題として、初対面同士の留学生と日本人学生との会話例を取り上げ、どんな問題点があり、どう改善するとよいかを話し合った。グループでモデル会話を作って、実際のやりとりをスキット風に発表、批評し合うというワークショップをおこなった。改善すべき問題点は以下のように3点にまとめられた。

1. 会話の進め方にかかわるもの
2. 日本語の語彙や表現
3. 伝え方、話し方や態度など非言語的な要素

ちょうど翌週に留学生カフェが開催され、学生のコメントには、「わかりやすい日本語を使うようにした」「自己紹介や留学生の身近な話題を中心に、積極的に話しかけた」など、授業内容を意識したコメントがみられた。

#### 3. 2. 2. 「話すトレーニング課題2」

課題は、直接問い合わせに来た留学生に対して、柔道部員2名が対応するという場面の会話例である。問題点と改善点について、以下のような内容がリストされた：

問題点：

- 方言と英語(多言語)使用について
- 返答が中途半端で、あいまい：「あつ、まあ」「まだ、先輩も来てないし」
- 言い回しが不親切で面倒くさそう。「あたしら、柔道部やけど、なんか?」
- 短く縮めた表現：月水金
- 「そう言うたげたら」など2通りにとられそうなあいまい性が残る言い回し。
- 「むつかしいなあ」と言う表現は留学生を仲間に入れてたくないような印象を与える。

- 曜日など必要な情報が正確に伝わっていない。
- 留学生へ質問する配慮がなく、関心をもたれていない印象を与える。

改善点：

- わかりやすい標準語を用い、言語は統一する。
- 誤解されやすい不完全な文、言い切りの表現をわかりやすくする。省略語も留学生にはわかりにくい。
- 留学生の要望を聞いておき、わからないことは後で連絡するなど、現状でできるだけ配慮をする対応を。内輪での会話は、留学生を不安にさせ、疎外感を感じさせる。

さらに、話すトレーニング課題1と2との違いについても議論した。1は対話者が初対面で、お互いの情報をやりとりするという会話だが、2は、留学生(外部者)の目的は必要な情報を求めており、それに対して柔道部員(内部者)がその情報を提供するという違いがあった。つまり、2では相手が知りたいこと、必要としている情報を、正確にわかりやすく提供する工夫が必要である。

さらに2人の会話(1)と3人の会話(2)の違いもあり、3人会話になると、情報共有が複雑になるので、お互いに紹介し合う、お互いの立場の違いをふまえて、相手に配慮するなどの方法を実践的に学ぶことができたようだ。とくに、ウチの人(柔道部)は、ソトの人(留学生)を排除することなく、受け入れる対応やコミュニケーションの方法を工夫すべきだろう。



授業風景1 グループ活動

### 3. 2. 3 「話すトレーニング課題3」

課題は、留学生の使用する日本語表現に問題があり、日本人がいやな気持ちになる状況をどう改善すべきかというものである。問題点と改善点についてリストアップして、話し合った：以下の(1)から(5)の表現について：

大竹さんは、留学生の楊(よう)くんやリサさんと話をしている、ときどきいやな感じがすることがあります。たとえば、次のようなときです。

- (1) 大竹「このお茶、おいしいね。」  
楊「そうですよ。」  
大竹[心の中で] (私が先に言ったんじゃない。偉そうに。)
- (2) リサ「私といっしょに昼ごはんを食べたいですか。」  
大竹[心の中で] (別に食べたくないよ。あんたは女王様?)
- (3) 楊「きょうはアルバイトがあるんですから、先に帰ります。」  
大竹[心の中で] (アルバイトのことなんか聞いてないよ。勝手にしなよ。)
- (4) リサ「この本はおもしろいですから、読みなさい。」  
大竹[心の中で] (先生でもそんなに偉そうに言わないって。)
- (5) 楊「私は5回電話しましたが、大竹さんは電話に出ませんでした。だから返事をしませんでした。」  
大竹[心の中で] (わざと出なかったんじゃないのに、なんで責められるの。)

問題点：

- ① 真意を考える
- ② 誤りをどう直せばよいか
- ③ どう伝えたらよいか (不快感を与えることなく、誤りを伝える方法を考案する)

改善点：

- (1) 「そうですよ」→「そうですね」  
真意：賛成、共感
- (2) 「食べたいですか」→「食べませんか」、「食べましょう」  
「食べていいですか」  
真意：誘い、提案  
(母語が影響されている可能性「would you~?」)
- (3) 「あるんですから」→「あるので」「ありますから」  
「先に帰ります」→「お先に失礼します」「先に帰ってもいいですか?」  
真意：理由、報告、許可
- (4) 「読みなさい」→「読んでみてはどうですか」「おもしろいので、読んでみてください」  
真意：提案、勧誘
- (5) 「5回」→「何度か」回数を言わなくていい。

「返事をしなかった」→強調しなくてもいい。「返事をするのができませんでした」

「電話に出ませんでした」→「通じませんでした」

真意：報告、理由の説明

このように外国人がよく間違っ使用しやすい表現がある。そうした外国人の誤用の傾向を知り、慣れておく必要がある。それと同時に、使用状況に合わない場合には、丁寧さが欠け、不適切な使い方になることにも注意するよう伝えなければならない。

### 3. 2. 4 「書くトレーニング課題4」

三重大学の在校生用のウェブページに掲載されている「大規模災害時の対応」についての課題である：

読んでみると、日本人学生向けの表現と、(おそらく)留学生向けにわかりやすく表現しようとした文が( )内に書かれています。それでも、まだなんとなくわかりにくいところもあります。( )をはずして、全体として、留学生向けに、ですます調で、わかりやすく書き換えてみてください。

#### 大規模災害時の対応(原文)

##### 地震発生時

- ①まず、身を守る(転倒のおそれのある書庫などから離れ、机の下などに身を隠す)
- ②すばやく火の始末(火を使用していたらすぐに消す)
- ③非常脱出口の確保(ドアを開ける)

##### 地震発生後(1~2分)

- ①火災の有無を確認(火災が発生したらすばやく消火)
- ②同室内のけが人を確認(倒れた書庫等の下敷きになっていないか、けが人を確認し救助を求める)
- ③作動中の実験器具等の停止

##### 地震発生後(3分)

- ①隣接する部屋同士で助け合う(倒れた書庫等の下敷きになっていないか、けが人を確認し救助を求める)
- ②余震に注意(建物の状況により、余震で倒壊する恐れのある場合は避難所に避難)

出典 (<http://www.mie-u.ac.jp/students/rules/Saigaij-Taio.html>)

問題点として指摘されたことは以下ようになる。：

- ・漢字が多い。とくに漢字による複合語表現：「大規模災害時」「有無」「同室内」など
- ・文が長い：「建物の状況により、余震で倒壊する恐れのある場合は避難所に避難」
- ・具体的な行動がわかりにくい：「身を守る」「余震に注意」
- ・「しましょう」と「ください」はどちらが良いか。
- ・電球が落ちることを「電気が落ちる」と書いたが、通じるか。

- ・どこに逃げておけばいいのかを書いておくことも大事では。
- ・「怪我」は、漢字、カタカナ、ひらがなのどれがいいか。  
→中国でも漢字は使わない。日本語でもひらがな表記が基本らしい。
- ・「消火器やめれたタオル」は、消火器がわからないし、水は使ってはいけないのか。→消火器は難しい言葉。
- ・「地震に気をつけてください」は、どう行動していいのかわからない。
- ・「助けを呼んでください」は、どう行動していいのかわからない。

グループごとに、模造紙に改善した緊急時日本語を書いて、発表して、批評し合った。



授業風景2 緊急時日本語の発表の様子

策について議論する。チューター活動を通して、留学生が困っている内容について、日本人に提示する。そして、日本人が困っている内容について話し合う。

(2)「チューターマニュアル」グループ：

日本人チューターを対象に、チューター・マニュアルを作成する。このマニュアルとは、Facebook 等でチューター、留学生双方の体験談を集めて作成する冊子である。チューターとしての心構え、日本語学習のための参考文献、留学生の要望、などの情報も盛り込む。

(3)「広報」グループ

学生の視点で広報活動をおこなう。チューター制度を知らない学生向けに、チューター制度やチューター活動についての情報提供をするポスターを作成する。



授業風景3 グループ・プロジェクトの様子

### 3. 2. 5 「書くトレーニング課題5」

日本語学習支援として、留学生の授業レポートや論文の日本語を修正する機会も比較的多いと思われる。日本人学生にとってもレポートや卒業論文作成は、決まった形式をふまえて、論理的な日本語表現を意識して書かなければならないので、骨の折れる作業である。この課題は、「インターネット・ショッピングに関する研究」という卒業論文の最初についている論文要旨の文章を読み、問題点を見つけ出し、よりふさわしい表現と内容に書き直すというものである。

### 3. 3 グループ・プロジェクト

後半は、チューター支援を目的として、次の3つのプロジェクトを立ち上げ、活動をおこなった：

(1)「チューター会」グループ：

日本人チューター（経験者と未経験者との交流も含む）を対象に、チューター会を開催する。内容は、アンケートなどで集めたトピックについて話し合い、話し合いで出された内容と解決

また、受講生の一人はチューター経験があり、留学生との関係を築きながら、さまざまな問題に直面してきた経緯がある。この経験を他の受講生とも共有するために、プレゼンをおこなってもらい、質疑応答の時間を設けた。チューターとして心得ておくべき留意点や注意点、日本語学習支援の過程での失敗とそれに対する改善策、チューターと留学生の連絡方法など、より具体的な経験談を語ってもらう機会を得ることができた。

### 3. 4 日本語教員による特別講義

3. 3のグループ・プロジェクトに関連して、実際に留学生に日本語を教えている現場から、国際交流センターの日本語教員である松岡知津子先生に依頼して、特別講義をおこなっていただいた。事前に学生には質問項目をあげてもらい、講義内容の参考にしていたいただいた。

本講義によって、留学生が学ぶ日本語についての知識が深まった。留学生にとって何が難しいか、というのは言語的背景や学習レベルによって異なっている。日本語母語話者が国語とし

て学ぶ日本語の知識と留学生が習得する日本語は異なっている。「留学生とのコミュニケーションのコツは何ですか?」という質問に対して、「1人1人とつきあう姿勢が大切であること、学生がチューターとして支援できることを活かして、留学生との信頼関係を築くことが大切であること」を学ぶことができたようだ。とりわけ「チューターマニュアル」グループにとって、日本語チューター向けにどんな内容を盛り込むかという点から具体的なアドバイスが多く得られたことは有意義であった。



授業風景 4 松岡先生の特別講義の様子

## 4. プロジェクト・グループの成果

### 4. 1 3つのプロジェクトの成果

3つのプロジェクトの成果について簡単に報告する。それぞれ7月の留学生カフェでの成果報告で発表をおこなった。

#### (1)「チューター会」グループ:

日本人チューターを対象に、チューター会を開催したことで、これまで顔を合わせることがなかったチューター同士の連携を強めるきっかけが得られた。定期的に集う機会を増やし、継続できることを期待したい。

#### (2)「チューターマニュアル」グループ:

チューター活動アンケートを基にして、「チューター活動サポートブック」を作成した。日本人チューター経験者の声、チューター制度を利用した留学生の声を盛り込み、会話のトピック例や日本語学習に関する参考文献などのサポートを含め、8ページの冊子にまとめたのは貴重な成果であるといえる。

#### (3)「広報」グループ

チューター制度をよく知ってもらうため、チューター制度についてのポスターを作成した。チューターに関する公的な支援は、留学生支援室が対応しているため、今後は、十分に情報提供や事前相談をおこないながら連携していく必要があることを確認した。チューター向けには「チューター手引き」がすでにあるが、今後は新規のチューターに対するオリエンテーションも合

わせておこなうことも検討されており、一定の成果があったといえる。

### 4. 2 受講生の取り組みから得られた成果

2で述べた二つの支援の柱: 留学生の日本語学習支援と日本語チューターへの支援、を順番に組み合わせて、授業の流れを構築したことは、授業の効率的な運営につながったといえる。受講生が、留学生の存在を意識しながら、日本語を話す、書くという課題に取り組むことによって、具体的な問題点を見つけ出し、改善を実践的に学ぶことを実感できたのは貴重な成果といえよう。

今年度は、試行錯誤を重ねた昨年度の経験が活かされ、かなり円滑に授業運営が進められた。グループ活動を通して、留学生と日本人学生との交わりも自然に深まり、なにより留学生が積極的に授業やプロジェクトに協力してくれたことは、この活動にとって意義深い。

## 5. 反省点と今後の課題

2013年度の授業活動について振り返り、その過程と成果を報告した。3つの日本語学習支援のプロジェクトは、チューターに求められるニーズの多様化に応えることを重視した活動として、それぞれ貴重な取り組みといえる。本来の授業の目的であるチューターへのサポートとして日本語学習支援の活動を取り入れたが、スキル養成としてはまだ十分とはいえない。個々の留学生が必要としている日本語学習の課題に向き合うための方法論については議論する余裕がなかったことは反省点である。今後は、留学生のニーズに合わせて提供できる日本語学習支援とは何かをさらに模索しながら、チューター学生に身につけてもらいたいコミュニケーションスキルの向上に取り組みたい。

## 謝辞

キャリア支援センター長の中川正教授には、授業の準備段階から授業の理念構築と運営全般について、実質的なご協力と有意義な助言を多くいただいた。ここに記して感謝申し上げます。また、この授業の学生プロジェクトに対して快くご支援いただいた留学生支援室のスタッフの皆様にも心より感謝したい。

## 参考文献

- 野田尚史・森口稔 (2003) 『日本語を書くトレーニング』 ひつじ書房  
 野田尚史・森口稔 (2004) 『日本語を話すトレーニング』 ひつじ書房